教育と文化

太古から現代まで

「これ、何だろう？」
出土した土器を見る子どもたち
（山田北小学校「山北ドキドキ歴史館」で）

房の沢古墳群の発掘調査現場

昔の山田は、どんなようすだったのかな？

山田町教育委員会

古代の山田

交易がさかんだった古代 ―房の沢古墳群―

出土した蕨手刀。ワラビのような柄に角度がついていて、日本刀の祖先だと考えられています。

山田北小学校のそばにある房の沢古墳群（表紙下の写真）の調査は、1996（平成8）年、三陸縦貫自動車道の工事中に蕨手刀が発見されたことから始まりました。

この古墳群は、今から1300年ほど前につくられた有力者の墓だと考えられ、鉄剣や鉄鏃（鉄の矢じり）、鉄の馬具・農具、スズ製の釧（腕輪）、水晶の切子玉、黒曜石、須恵器などが出土しました。どれも山田で作られたものではなく、当時の人びとはかなり広い範囲で交易をしていたことがわかります。

さらに、古墳のそばには馬の墓も発見され、この地域で馬が飼われていたこともわかりました。さまざまな出土品も、馬と交換で手に入れた宝物だったのかもしれません。

道路の開通のため、現在は発見された35基の古墳群のうち3基だけがのこされています。

房の沢古墳群近くから山田湾を望む。

出土したスズ製の釧（腕輪）と黒曜石。当時の日本にはスズの加工技術はなく、大陸との交易が考えられています。

昔はもっと海岸が近かったんだって。

昔の人も、同じ風景を見ていたのかな。

まつりちゃん　海大くん

山田町教育委員会生涯学習課文化係主事 小野寺純也さんのお話

私たちの主な仕事は、古墳などの遺跡を今のまま守ることです。

発掘調査は工事などで遺跡がなくなってしまうことになったときにします。

山田には多くの製鉄遺跡があります。荒神の砂浜に行くと、ところどころ黒い砂が見られます。それが砂鉄で、昔の人も簡単にとることができたので製鉄がさかんだったのです。また、房の沢古墳群の出土品の多くは、山田で作ったものではなく、ほかの地域との交易で得たものだと考えられています。

製鉄遺跡と今の砂浜、山田とほかの地域、そういうつながりがわかっていくのがこの仕事のおもしろいところです。

みなさんにも、昔の人の生活と今の生活がつながっていることを少しでも感じてもらえればうれしいです。

中世の山田

曽伊館。豊間根川と荒川川にはさまれた長い尾根の中央にあり、二つの川の流域を見渡すことができたと考えられます。

裏山がお城かも？ —中世の館—

中世（鎌倉時代～室町時代～戦国時代）の山田のようすについてはよくわかっていませんが、当時の館（有力者の邸宅や城）の跡はいくつかのこされています。代表的なものが曽伊館（豊間根地区）です。

山田町文化財保護審議会委員 佐藤仁志さんのお話

前九年の役で朝廷軍に敗れた安倍一族の安倍七郎孝任は、母・阿波見と郎党17人とともに合俵村に落ちのびてきました。「合俵」は豊間根地区の古い地名で、現在でも宇名田の宝珠院の森を「合俵の森」と言います。孝任の子孫、宣任が住まいを移したのが曽伊館です。

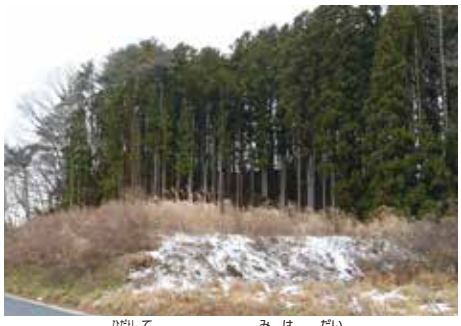
この安倍氏が豊間根という氏を名乗るようになったのですが、「豊間根」という地名の由来はよくわかっていません。古くから「トヨマナイ」と呼ばれていたことはわかっていますから、あるいはアイヌ語由来なのかもしれません。

八幡館

もっと身近なところにも、館の跡はのこっています。町役場と山田八幡宮の裏山は、八幡館（鷺洞館）の跡です。

『山田八幡宮由来』には、源 義経が北に逃れる途中に鷺洞館に立ちより、家来の佐藤継信が生きている間に片時も手ばなすことのなかった守り本尊の「清水観世音菩薩」を継信の長男・義信に託し、この菩薩像が同神社のご神体となったと記されています。

八幡館。守りのために斜面が段々にされています。



沢田館。左手の尾根が見張り台ではないかと考えられています。

沢田館

柳沢地区の旧山田病院のそばの山は沢田館の跡です。現在八幡宮が祀られている平場に本館が置かれていたのではないかと考えられています。

大沢館

大沢地区の八幡宮の山は大沢館の跡です。山の正面には山田湾と大島、東に浜川目方面、西に袴田方面を見わたせ、たいへん見晴らしがよかったにちがいありません。

町内には、ほかにも織笠館・坊主山館（織笠地区）、小田の御所・船越御所（船越地区）などの城跡があります。みなさんの家の裏山も、もしかしたらそうかもしれません。

大沢館。豪族である大沢氏の居館だったと言われています。

近世～近代の山田

ブレスケンス号の来航を伝える江戸時代の絵図。「寛永二十」「おらんだ船」の文字が見えます。

オランダ島に眠るのは ―外国船の来航―

1643（寛永20）年6月、オランダ船ブレスケンス号が山田湾に漂着しました。突然現れた外国人に人びとは驚きましたが、彼らを歓迎し、ブレスケンス号は水の補給を受けて出航しました。それを聞いた南部藩では、外国人がまた上陸してきたらとらえるように命じました。当時、外国との行き来は制限されていたからです。

7月、ブレスケンス号は再び山田湾に入り、船長以下10名がとらえられ、取り調べのために盛岡に、そして江戸に送られることになりました。

オランダ島の名前の由来となったブレスケンス号事件のあらましですが、山田湾に突然現れた外国船はブレスケンス号だけではありません。

1871（明治4）年にはイギリス船シルビア号が来航し、このとき山田湾で採集された貝の標本が大英博物館にあります。1873（明治6）年にはロシア船が来航し、航海中に亡くなった水兵をオランダ島の東岸に埋葬しました。ほかにもフランス船やイタリア船が来航した記録があります。

遠くロンドンの博物館にある山田湾の貝、オランダ島に眠るロシア水兵。目の前の海が世界につながっていることを示す話だと言えるでしょう。

伊能大図に見る山田 ―伊能忠敬の測量―

伊能忠敬は下総国佐原（今の千葉県香取市）の商人で、50歳になってから天文・暦学を学び、1800（寛政12）年から足かけ17年をかけて日本全土を測量し、初めて実測による日本全図の作成をなしとげました。山田には1801（享和元）年に立ちより、測量を行いました。

香取市には、名前が「山田町」だったころがあり、その縁から、2017（平成29）年には忠敬が作成した地図のうち岩手・秋田・青森の北東北3県分の実物大レプリカの上に立って見ることのできる「伊能大図パネル展」が中央公民館で開催されました。

伊能大図の山田町の部分。「豊間根」「大沢」「山田」「織笠」「船越」の文字が見えます。

鯨と海の科学館 専門指導員 道又純さんのお話

冷凍・冷蔵技術のない江戸時代、山田でとれた海産物は塩づけにしてほかの地域に運んでいました。実は、山田では古くから海水を煮つめて塩を作っていたのです。

延宝年間、つまりブレスケンス号が来てから30数年後には、塩釜（塩をつくる施設）に税をかけた記録がありますし、明治三陸津波の被害調査では流された塩釜が数えられています。

第二次世界大戦中には前須賀に塩田が設けられましたし、戦後すぐには製塩所がありました。山田の塩作りは、1947（昭和22）年ころまで各地区で行われていたのです。

近代～現代の山田

船は人びとの足 ―三陸汽船と巡航船―

1908（明治41）年、三陸汽船が三陸沿岸航路の運航を始めました。山田などに寄港しつつ宮古～塩釜を結ぶ1日1便で、宮古～山田は2時間ほどでした。

山田湾の巡航船は1920（大正9）年ころ、山田・大浦間で始まりました。1922（大正11）年には大浦～船越・田の浜や大浦～浦の浜～山田も運航され、昭和になると隅田川の遊覧船を買って山田・大浦間の巡航船にしていました。山田・大浦間の1日5便のうち、2便は船越中学校の通学用に浦の浜を経由しました。山田・船越中学校等の統合により浦の浜経由はなくなりましたが、1969（昭和44）年には山田中学校のスクールボートが就航。1997（平成9）年の廃止まで、巡航船は人びとの重要な足であり続けました。

山田湾に停泊する三陸汽船。大正時代の写真です。

歴史の証人、クジラ橋 ―第二次世界大戦と商業捕鯨―

現在のクジラ橋とスロープ

第二次世界大戦中、大沢地区には三陸沿岸航路を守る海軍の水上機基地が、さらに西側には掃海艇の基地が置かれました。大沢地区にある福登野橋（クジラ橋）の下のスロープは、このときの水上機滑走台の一部です。

1945（昭和20）年7月15日、跡浜地区が空襲され、家屋3戸が焼失、8月9・10日には水上機基地と山田湾に停泊していた掃海艇が爆撃され、戦死者を出しました。

戦後、1947（昭和22）年、水上機基地の跡地に日東捕鯨株式会社の大沢事業所が置かれ、スロープはとったクジラを引きあげるのに利用されました。大沢地区でホタテの養殖がさかんになり、その出荷のためにスロープの上にかけられたのがクジラ橋です。クジラを引きあげるときだけ両側にはねあげる可動橋でした。鯨と海の科学館に展示されている骨格標本のマッコウクジラは、ここで1987（昭和62）年に水あげされたものです。

クジラを引きあげているところ

コラム

大浦地区では18世紀から網を使ったイルカの追込漁が行われていました。これは大正時代まで約200年間続けられ、1913（大正2）年には2000～3000頭という大量のイルカがとれたと伝えられています。

1913（大正2）年のイルカ漁

山田(三陸)の津波史

ここでは、山田をふくめた三陸地方をおそった主な津波を年表にまとめます。

869(貞観11)年	貞観地震による津波。
1257(正嘉元)年	久慈・野田に津波の記録あり。
1454(享徳3)年	享徳地震による津波。
1611(慶長16)年	慶長三陸地震。東北の慶長津波。
1616(元和2)年	釜石・大槌・鵜住居に津波の記録あり。
1677(延宝5)年	大槌・宮古・鍬ヶ崎に津波の記録あり。
1687(貞享4)年	ペルー沖地震による津波。
1751(宝暦元)年	大槌に津波の記録あり。
1762(宝暦12)年	八戸沖地震による津波。
1763(宝暦13)年	八戸沖地震による津波。
1793(寛政5)年	寛政地震による津波。
1835(天保6)年	福島沖地震による津波。
1856(安政3)年	安政八戸沖地震による津波。
1861(文久元)年	陸前で被害の記録あり。
1896(明治29)年	明治三陸地震。明治三陸津波。
1933(昭和8)年	昭和三陸地震。昭和三陸津波
1952(昭和27)年	十勝沖地震による津波。
1952(昭和27)年	カムチャッカ半島沖地震による津波。
1960(昭和35)年	チリ地震津波。
1968(昭和43)年	十勝沖地震による津波。
2011(平成23)年	東北地方太平洋沖地震。東日本大震災。

「山田浦では一の波は坊の沢(房の沢)、二の波は寺沢、三の波は関口川の橋の上まであがった。織笠では礼堂(霊堂)まであがった。津波は小谷鳥から大浦に越した」という記録があります。

織笠小学校前にある「大海嘯記念碑」。裏側には明治三陸津波での織笠村のようすが記されています。

山田八幡宮にある「津浪記念碑」。「地震があったら高い所へ」「遠くへ逃げては津波に追いつかれる」など、昭和三陸津波の教訓が記されています。

町内にはこのほかにも津波を記録した碑があるよ。さがしてみよう。

越次郎さん

コラム

『海嘯被害明細図』は、明治三陸津波の当時、宮古警察署山田分署に勤務していた浅利和三郎巡査部長心得が被害のようすをまとめた貴重な史料です。当時の署員は9名。真っ暗闇の中(津波は夜8時半ころでした)、高い所に火をたいて避難場所の目印や炊き出しの場所とし、人命救助と被災状況把握のため駆けまわりました。

学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業
平成30年３月発行